

# ZOCALO 2020 2 ▶ 3

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

## 暗中模索をくぐりぬけて MOMASコレクション第4期 サポーターズ・チョイス！ 2020年2月8日(土)～4月19日(日)

当館では毎日14時から、美術館サポーターによるMOMASコレクション展の案内を行っています。美術館サポーターとは、当館を愛するボランティアスタッフのことで、現在は総勢約30名で、日々交替で活動をしています。

2020年は、美術館サポーターにとってガイド開始から20年目の節目の年です。20年間、当館の収蔵品と来館者をつなぐ架け橋を担ってきた彼らは、(ひょっとしたら学芸部スタッフよりも)「MOMASコレクションの楽しみ方」を熟知した存在だと言えるかもしれません。

今年度のMOMASコレクション第4期『サポーターズ・チョイス!』では、そんな彼らの「MOMASコレクションの楽しみ方」をもとに展示を構成します。20年の長い歴史のなかで、彼らが展示の企画に関わるのは今回が初めてです。当館スタッフにとっても、美術館サポーターにとっても暗中模索で始まったこの企画は、果たして無事に成功するのでしょうか…?

今回のZOCALOでは、その暗中模索の道程を少しだけお見せしたいと思います。

**展示方針**  
美術館サポーターは「作品と来館者の仲介役」という役割があると考えています。また、その仲介の方法は、書籍から学んだことをもとにする人もいれば、対話型鑑賞をする人もいて、多岐にわたります。そこで、その多様性を展示で見せるために、展示の視点を大きなものから小さなものへ、美術を語る側から受け手の内面的なものへと徐々にスライドさせていくことにしました。美術館サポーターが愛する作品の中から、来館者がお気に入りの作品を見つけて帰ることを、この展示の最終的な目標とします。

### 特に人気のあった作品たち

全サポーターが各コーナーにつき1つずつ作品を投票しました。

1位/4票：小茂田青樹《春の夜》(1930年) <1>

2位/3票：伊東深水《宵》(1933年)、

鎌木清方《慶長風俗》(1926年頃) <3>、

小村雪岱《おせん》(1941年頃) <2>、

ポール・デルヴォー《森》(1948年)



<2> 小村雪岱《おせん》1941年頃(後期展示)



<1> 小茂田青樹《春の夜》1930年(前期展示)



<3> 鎌木清方《慶長風俗》1926年頃(前期展示) ©Akio Nemoto

### 美術館サポーターからのコメント

・サポーターは、美術館・作品と、お客様との橋渡し役。作品の魅力をお客様にお伝えして、作品への想いを共有することでお客様とつながったら、その後はお客様に、作品の新たな魅力をお一人お一人のなかで紡いでいって頂きたい。美術館のコレクションは、そうやって、人々の心の中で育ててゆくのだと思います。

・「描くこと」の目的は千差万別、またそれを鑑賞する人の受けとり方も十人十色。私たちは美術館で時に作家と向きあい、時に自分の好きな様に自由に鑑賞して楽しめます。そんな美術館の楽しみ方をお客様と共有できたということ…

・令和という新しい時代に、私たちサポーターに作品展示のプランと一緒に考えましょうという学芸員からの嬉しいオファーをいただきました。今回のこの試みが美術館サポーターの活動を「一歩前へ」と押し進める1つのきっかけとなる様な機会になることを願います。

### 展示の構成(全4コーナー)

#### ①サポーターのお気に入りの作品を紹介するコーナー

人物をもとにした作品をとりあげながら、美術館サポーターの約20年間の作品解釈を見せ、史実等からあみだされる作品の魅力を発信します。

#### ②サポーターのお気に入りの作品をお客様と共有するコーナー

美術館サポーターの作品に対する感情や思いを、次の2つの展示を通してお客様と共有します。

(1) 造形に焦点を当てた展示：作品の「線」に注目した展示

(2) 経験に基づく展示：これまでの案内で印象に残ったお客様の発言を紹介

#### ③お客様が自分のお気に入りを見つけるコーナー

お客様の鑑賞経験をより豊かにするために、美術館サポーターから作品に関する「投げかけ」をします。

### ⇐投げかけ(一部抜粋)

「ミミズクやネコになりきって、絵の世界に入り込んでみましょう。どんな気持ちになりますか?見る人の数だけ、物語が語られる作品です。」



### ⇐お客様の発言(例)

「家でやってみたい!」

「スプーンを磨かなければ。」

上田薫《ジュエリーにスプーン》1990年



木村直道《シンバルを叩く男(バックミラー楽団)》1965-68年



モリス・ドニ《シャグマユリの聖母子》1925年

### 準備の工程

6月

- ・今後のスケジュールの説明
- ・展示テーマ案の募集開始

7月

- ・展示テーマ案の募集〆切。全47案が集まる。  
→提出された案を整理し、展示テーマ案を23案、作品の展示方法を8案にまで絞る。  
→提出された案をもとに、展示方針を決定する。

8月

- ・展示方針にそって、展示テーマの多数決を行う。

9月

- ・多数決により、2つの展示テーマが決定する。(人物をもとにして作られた作品から作者の意図を探る展示/作品の「線」に注目した展示)
- ・展示方針、決定した展示テーマに沿って、展示作品の募集を開始する。

10月

- ・展示作品募集〆切。約50点、作品案が集まる。  
→提出された案を整理して、展示作品を決定する。

11月

- ・展示についての大討論会その1  
→主に、お客様に作品に関する「投げかけ」をするコーナーについて議論を交わした。

12月

- ・作品配置案の発表
- ・展示についての大討論会その2  
→まだ決めきれない細かい部分について議論

### ～担当者から～

この展示の担当者になったときに私が感じたのは、楽しみな気持ちが半分、不安な気持ちが半分でした。というのも、勤務2年目の私にとって、現実に展示を企画するのは今回が初めてだったからです。当館にとっても、美術館サポーターにとっても、そして私自身にとっても初の挑戦に、「とにかくなんとか形にしなければ」と、ときに躓きながらもがむしやりに準備を進めてきました。

そんな状況だったので、美術館サポーターのみなさんには大変で迷惑をおかけしてしまいました。本当に申し訳ありませんでした。また、それにも関わらず、若輩者に最後までお付き合いいただき、本当に、本当に、ありがとうございました。

展示室には、美術館サポーターの20年間の努力と熱い思いの結晶をぎゅうぎゅうに詰め込みました。ご来館のみなさまは是非、その結晶たちの輝きが照らし出す、当館のコレクションの新たな魅力を心ゆくまでお楽しみください。(H.K.)

## 研究ノート 1950年代 一戦後日本美術の帰結に関する研究

1950年代をテーマとする展示会の開催をめざして、2年前から複数の美術館の学芸員・研究者による研究会を開いて準備を進めています。戦時中の統制から解放された1950年代、国際社会に復帰した日本では多彩な美術の動向が育まれました。さまざまな可能性に満ちたこの時代の美術については、いくつかのポイントからふりかえることができます。たとえば同盟国としてのアメリカの文化戦略の影響、体制や資本主義に対抗しようとした潮流、日本の個性の再発見に向かおうとした動向などの点からアプローチができるでしょう。

1940年代から50年代にかけての美術については多くの研究の蓄積があり、近年は展示会も開かれるなど、さらなる注目を集めています。これまでの研究や展示会では、戦時下の体制の中で抑圧されてきた様々な動向や、前衛美術が戦後になって再び開花する側面をクローズアップするものが比較的多かったように思われます。

そこで今回企画している展示会では、そうした見方に加えて、イデオロギーと絵画の関係の変遷、日本画・工芸界の動向、海外発信のあり方などについても目を配り、さらに多様な流れについてジャンルや地域を横断したリサーチを試みています。これまでの研究会では、1950年代の彫刻の動向、ヌード写真に対する意識変化、世界の美術界へのアメリカの進出、写真界へのアメリカの影響、池田龍雄・岡本太郎の制作の中でアメリカを意識した側面などに焦点を当てました。現在のところ、展示会の柱として「アメリカの光と影」、「プロテストする声」、「日本をみつめて」などのテーマが候補に挙がっています。

今後の研究会では、アメリカで学び戦後の日本の写真界に衝撃を与えた石元泰博のシカゴでの足跡や、国際的な美術の文脈への復帰を念頭にさかんに海外美術展を開催した美術館・博物館の活動、ラッセル・ライト計画※など、これまであまり知られていなかったポイントに光を当てつつ、さらに調査研究を重ねていく予定です。(R.G.)

※アメリカの国際協力庁の資金によって、ラッセル・ライトを中心とする4名のデザイナーを招聘、日本各地で特産の工芸品の発掘とデザインの指導を行い、帰米後に宣伝と販売を促進する計画。



ラッセル・ライト計画 サンフランシスコ会場風景(「昭和35年度日本手芸品対米輸出推進計画報告書」1961より)